

# ヨーロッパの忘れられた歴史：

## 植民地博物館の「人間動物園」から「人間戦利品」まで

By Garikai Chengu

Global Research, August 16, 2015

【訳者注】これはアフリカ出身の黒人知識人からでなければ、聞けない話である。これを訳したのは、今現在の世界情勢、つまり英米が弱小国に対して行う殺人や略奪は、合法的として許され、報道もされないが、それへの抵抗はすべて犯罪とされるという異常な事態に、側面から光を当てるものだからである。日本人を含め、我々大多数は、盗品で埋められた大英博物館を回って感嘆し、これを異常とも思わずにいる。日本人を消されるべき側の野蛮人と見たヘッケルなどの肖像を、我々は教科書に載せ、進化論の推進者として称えている。もし、そういう見方が根底になかったら、アメリカは日本に原爆を落とさなかっただろう。(NB: この論文に不正確な部分があったとしても、サイト経営者は責任を負わない、という断り書きがあることを付記しておく。)

最近、ジンバブエのライオン「セシル」が戦利品として殺されたとき、世界的な憤慨が起った。しかし今日に至るまで、イギリスもアメリカも、現住民の虐殺と隷属化の“人間戦利品”である遺骸を、博物館に展示し続けている。

イギリスは最近、ある人々の遺骸を本国に返還することについて、ジンバブエと交渉中であると明らかにした。これはイギリスの植民者たちと戦ったジンバブエの戦士たちのもので、現在、ロンドンの自然史博物館に展示されている。

火曜日、ジンバブエ大統領 **Robert Mugabe** は、演説の中で、ジンバブエ解放戦線の兵士たちの「首が植民地占領軍によって切り落とされ、地方住民に対するイギリスの勝利と隷属化を記念するために、イギリスへ直送された」と話した。

2日後の木曜日の晩、英外務省は、「ジンバブエから来た遺骸（の一部）」が、確かにロンドンの博物館に展示されていることを認めた。

ムガベ大統領はまた、「今日この時代に、切り取った首を戦利品として国立の博物館に保存

するという事は、間違いなく人種差別的な道徳的退廃、サディズム、人間的感受性の欠如の最高の形態と位置付けなければならない」と述べた。

英と米の植民地政策に先立ち、アフリカ人による最初の博物館がアフリカに創設され、多くのアフリカ文明に重要な役目を果たした。実のところ、博物館は2000年以上にもわたって、人類史の一部となってきた。

人目を引く品目を集めて展示するという伝統は、黒人の古代エジプトに始まっている。ローマ帝国以来のほとんどの新興の西洋文化は、珍しい動物や植物を彼らの博物館に展示した。博物館 *museum* という言葉は、ギリシャ語の *museion*（ミューズの神々のための神殿）から来ていて、もともと芸術、科学、発明工夫といったものを奨励するのが目的だった。ヨーロッパの「暗黒時代」の後、博物館の発達の次の一歩は、ヨーロッパの一部を征服し文明化した、アフリカの黒人、ムーア人の発明の才能の結果として起こった。自然界の研究は、西洋人の無知の千年間の後、ヨーロッパ中に“珍しいものの戸棚”を設立した黒人ムーア人によって、再び奨励されるようになった。

19世紀以前には、博物館は小さく個人的なもので、それぞれの国家の貴族階級にだけ開放されるのが普通だった。19世紀になって、我々の知るような博物館が出現した。大英帝国の隅々から流れ込んでくる略奪品とともに、現代の博物館が生まれた。

大英博物館が作られたのは主として、17~19世紀間に、アフリカから略奪された工芸品の収納庫としてであった。このような略奪品の中には、多くの古代エジプトの工芸品が含まれているが、これは最初の博物館を作った古代エジプト人が、彼ら自身、黒い皮膚のアフロ・アンセストラルだったことを証明している。

世界を通じて、イギリスの植民地主義の生み出した一つは、文化的造形物、神聖で貴重な対象の暴力による私有化であり、その伝統の一つは今も続いている大英博物館の展示である。何世紀もの間、大英帝国の博物館は、ヨーロッパに奴隷制と植民地主義が行われている間に、略奪したり盗んだ工芸品を幅広く並べて見せることによって、国家的な白人の優越感を高め、大英帝国の文化を栄光化するのに役立った。

植民地の人種差別テロリズムの、かなり残酷な歴史の一例は、ヨーロッパの人間動物園の長い歴史で、アフリカ人や他の征服した現住民を、動物と全く同じように見世物にした。男や女や子供たちが誘拐され、檻に閉じ込められて、ヨーロッパの大観衆の前で見世物にされた。多くの人々が、捕えられてから十分に食べ物を与えられなかったために死に、また拷問のような条件下で生かされた。人間動物園を訪れる人々は、アフリカの子供たちを、よく棒切れ

でつつき、食べ物を投げ与え、囚われ人たちにほうびを与えて、いろんな屈辱的な行為をさせることが許された。

土着の人々を見世物にするというこの野蛮な習慣は、コロンブスやバスプッチのような探検家が、原住民を騙して本国に連れ帰り、戦利品として笑いものにし、見せびらかしていた時代から始まったものである。

1800年代後期になると、ヨーロッパは、パリ、ハンブルク、アントワープ、バルセロナ、ワルシャワ、ミラノ、それにロンドンのような都市の人間動物園が大盛況だった。3,400万人の人が、1931年のパリ万国博での人間動物園を見に訪れた。ニューヨークもまた、このような人種差別的、侮辱的な習慣の、道徳的例外ではなかった。ニューヨークは、これら人気のある展覧会を、20世紀にまで継続させ、両世界大戦の終わった後まで、それは続いた。何百万というアメリカ人がこれらの見世物を見にやってきた。

第二次大戦の前に、アメリカの人間動物園は最盛期を迎え、当時のニューヨーク・タイムズの報道によると、「檻の中の人間という光景に、はっきりと反対を表明する人々は少なかった。群衆はそれが好きだった。…彼らが受けていると思われる屈辱と侮辱を、嘆いてみせるのは馬鹿ばかしいことだ。」アメリカとイギリスが、人間動物園を完全に通常のものとして受け入れていたときに、アドルフ・ヒトラーだけはこれを禁じた。

白人と黒人の最初の大量接触を実現することによって、また“他者”の見世物化を進めることによって、人間動物園は、西洋における科学的な人種差別から民衆的な人種差別への、進歩的変遷のカギ的要因だった。

アフリカ人を動物園で見世物にするというヨーロッパやアメリカの原始的習慣は、1950年代まで続いた。1950年代の間に、アフリカ人に対する国家公認の人種差別は、ヨーロッパの人間動物園から、その博物館へとバトンが渡った。実は歴史的に言って、黒人を野蛮人・未開人として見る最も非難すべき黒人観と、最も侮辱的な黒人女性像をもっていたのは、イギリスの博物館だった。

サラ・バートマンという名の20歳の南アフリカの女性は、人間動物園に人気を与えた暗黒時代の象徴的存在と言っていいだろう。彼女は1810年、外国の奴隷商人によってロンドンに連れてこられた。サラは、「ステアトピジア」(steatopygia)と呼ばれる遺伝的特徴——大きな尻と長い陰唇——をもっていた。何千というイギリスの男や女や子供が、人間動物園にやってきて、彼女の裸の体に見とれた。サラは毎日のように、強姦と科学的調査の対象になった。1815年にサラはひどく惨めな状態で死に、彼女の骨格と性器と脳が、パリの人種

博物館に展示され、それらは 1974 年まで、ほとんど 1 世紀間そこにあった。2002 年、ネルソン・マンデラ大統領が正式に、彼女の遺骸の返還を要求した。

もし英プレミア・リーグのフットボール、ラグビー、バスケットボール、クリケットなどを観に、イギリスにやってくる観客数全体を寄せ集めるなら、総計 3000 万になる。これは大きな数だが、今年、大英博物館を訪れる人の数は 4900 万と予想される。博物館は、壮大な歴史物語、特に国家主義的・帝国主義的な物語についての議論の場として、重要である。

スポーツ観戦客の数よりも、イギリスが、国家として公然と盗品を見せびらかすのを見に来る客の方が多いということは、イギリスの国家体制に、文化的帝国主義と野蛮な人種差別が深く根付いていることを示すものである。

19 世紀後半の大陸支配をめぐる「グレート・スクランブル」の時代には、芸術作品が帝国主義的略奪の最も貴重なものであった。イギリスは今も恥じることなく、大英博物館、リヴァプール博物館などに、何百億、何千億ポンドの価値のある、盗んだアフリカの芸術品を、何千点も展示している。他にも、アフリカ、アジア、南米などから盗んだ、多くの貴重な美術工芸品が、個人の英国人の手に渡っている。特に注目すべきは「ベニン」ブロンズ像や象牙細工、その他古代の作品で、これらは特に 1897 年、帝国主義に反旗を翻した原住民と戦った女王陛下の兵士たちの報復攻撃の間に、イギリスの植民地主義者たちが略奪したものである。

大英博物館は長いこと、アフリカのものを各部屋に展示しており、その新しい「アフリカン・ギャラリー」はどこにも引けを取らない。その古代エジプト・コレクションは圧巻である。それもそのはずで、ドイツやフランス、ベルギーのアフリカ・コレクションにも、いくつかの重要な品目はあるが、これほど長い期間にわたって、征服した民族から、これほど多くの工芸品を略奪した国は他にはないからである。

大英博物館はアフリカのものだけでも、25 万点の工芸品を支配しており、そうした工芸品を盗み出すことは「当時は合法的だった」と主張している。いつでもそうだが、西洋が他の民族に対して犯罪行為をするときには、自分たちの行為は完全に誠実な、許された、合法的なものだと主張するという、捻じ曲がった奇怪な考え方をしている。大英博物館と図書館アーカイブズ・カウンシルの Arthur Torrington OBE は、率直に、「我々は展示品が盗品であることを認めたくない。もし一つがそうだと認めると、全部についてそれを認めなければならなくなるからだ」と言っている。

現代の大英博物館は、文字通り、抑圧された土着民の背中の上に建てられたと言ってよく、

その部屋すべては、ヨーロッパの植民地征服によって奪い取った品目に満たされている。しかし、今この時代に、いまだに盗んだ品物や人間戦利品を並べて見せるということは、現代の文明社会では許されることではない。

(ガリカイ・チェンゲーは、ハーヴァード大学研究者、連絡先は [garikai.chengu@gmail.com](mailto:garikai.chengu@gmail.com))